

社会的な自立へ向けた資質・能力の育成

～ 社会科における、よき学び手を育てる授業づくりを通して ～

大河原町立金ヶ瀬小学校

教頭 丹野 憲

I はじめに

日本財団が、2022年に日本・米国・英国・中国・韓国・インドの17歳～19歳男女を対象として行った「国や社会に対する意識」調査の結果によると、自分自身と社会の関りについて問われた質問で、日本は6か国中最下位となった。特に、「自分は大人だと思ふ」「自分の行動で、国や社会を変えられると思ふ」に当てはまる若者は全体の3割に満たず、他の国に比べて極めて低い結果となった。本研究は、第6学年（男子17名、女子14名）の社会科の教科担任としての取組となるが、当学級の児童に同じ質問を投げ掛けたところ、概ね同様の結果となった。児童の社会参画に対する意識の低さや、主体性を発揮しながらより良く生きようとする姿勢の危うさを懸念する。

一方、宮城県においては、東日本大震災の復興過程で、多くの子供たちの、自分たちの未来づくりに対する多様な取組が見られた。使命感、必要感を感じさせる何らかのきっかけがあれば、社会に影響を与える営みへの一歩を踏み出す力を内在している。

II 研究の目的

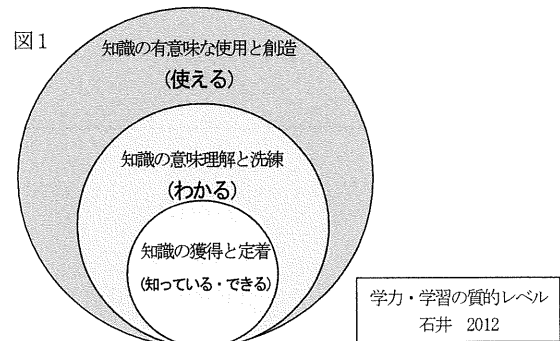
授業を、今ある社会や文化の再生産ではなく、未来を創り変えていく力を育む場とすることで、児童一人一人の社会的自立を支え、よりよい社会づくりの当事者を育てたい。そのため、児童が主体となる参加型の授業へとシフトし、みんなで学ぶことによって一人では生まれない考え方が誘発・創造されたり、それによって児童に発見の喜びを与え、ものの見方や行動の変化を生み出したりする場となることを目指したい。

III 研究の視点

(1) 単元を通した高次の目標設定（視点1）

知識・技能の総合的な活用力を問う「使える」レベル^{図1}の目標を、「単元全体を通した概括的な

内容（高次の目標：大きなねらい）」として設定し本時の目標と並行して児童に意識をさせる。



(2) 深い学習の誘発（視点2）

「社会的事象の見方・考え方」を基に、学習で得た知識に解釈を加え、生きて働く知識、児童が後々使える知識にしていく（概念的知識の形成）ための問いを投げ掛け、児童が自分で考えたり、気付いたり、話し合ったりする場を設定することを通して深い学習を誘発する。

社会的事象の特色や意味などを考えるための「問い」の例

- いつどのような理由で、はじめたのだろう。
- どのように変わってきたのだろう。
- なぜ、変わらずに続いているのだろうか。
- どのような工夫や努力があるのだろう。
- どのようなつながりがあるのだろう。
- なぜ、△△と□□の協力が必要なのだろう。 など

(3) 自分事の学習の追求（視点3）

実社会・実生活と結び付けて、学習課題を設定したり、学習したことを基に実践課題を設定したりすることにより、日常生活の文脈から学校での学習を見直し、学びがいや思考する必然性・切実感を大事にする授業を通して、児童の視野や世界観（生き方の幅）を広げ、揺さぶり、豊かにするような自分事の学習の追求につなげる。

IV 研究の実際

(1) オリエンテーション ～教師のねがいの提示～

日本財団の「国や社会に対する意識」調査を素材として、年度初めの授業開きにオリエンテーションを行った。「自分は責任ある社会の一員だと

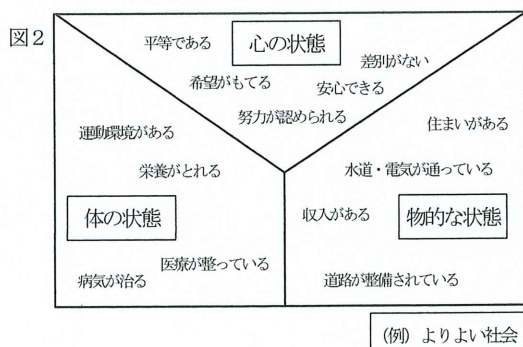
思う」と答えた児童は約 20%、「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」と答えた児童は約 15%であった。社会科を学ぶ意義は、自分たちの暮らしをより良くする知見を得ることであり、東日本大震災からの復興、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻、世界中で相次いで発生する自然災害など、刻々と変化する社会の現実に向けながら、社会の一員としての当事者意識をもって学習してほしいという「ねがい」（教科観・学習観）を提示した（視点1）。

また、教科書を概観し「我が国の政治の働き」について、学校・駅・公園等の身の回りにある公共施設、町役場や県庁舎、国会議事堂等の政治の中心などを取り上げ、その役割について話し合った後、「いつ、このような仕組みができたのか」「どのような人々の願いがこめられているのか」について話し合った（視点2）。

さらに、「我が国の歴史」については、児童が興味を持ったことを挙げさせ、古墳や争い（権力）、楽器・美術（文化）、黒船・鉄砲（外国）等の概念に束ねることで、「昔も今も、人間は同じ課題と向き合っている」「歴史は繰り返している」という児童の声を引き出した。歴史を学習する意義について、今の自分たちの生活をよりよいものにするためであることを価値付けられた（視点3）。

(2) 私たちの政治と暮らし ～思考ツールの活用～

政治について、教科書には「選挙で選ばれた人が、よりよい社会を実現する」ものであると書かれている。そこで、自分たちの考える「よりよい社会」とは何かを考えさせた。1人3つずつキーワードを挙げさせたとこ、**「健康な生活」「安全な食料」「安定した収入」**などの意見が出され、全員の声を拾った。さらに、思考ツール（ここではYチャート図2）を活用して整理させることによって、「よりよい社会」の概念の共有化を図った。



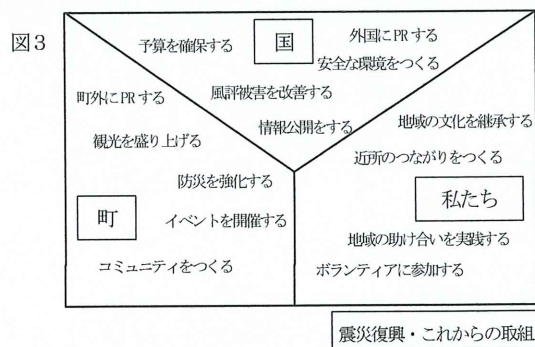
思考ツールで整理したのち、「よりよい社会とは〇〇な社会」という定型で言語化するよう、揺さぶりの問いを投げ掛けた。「よりよい」の定義は、「国」「大人」「子供」にとってなど、視点を換えることによって考え方が変わる。多くの児童は、「私にとって」のよりよい社会を考えていたため、「全員にとって」のよりよい社会を考える必要があることを再確認することによって、政治の働きについて深く考え、多面的に考えることができた（視点2）。

(3) 震災復興 ～課題づくりの工夫～

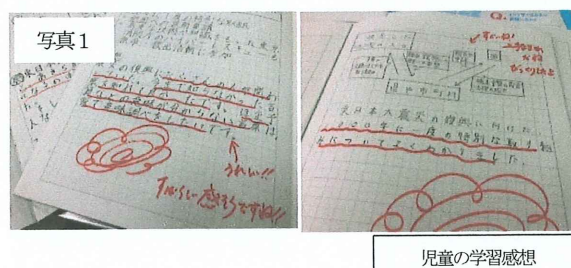
私たちの政治と暮らしでは、政治の仕組みをひとつとおり学習した後で、東日本大震災からの復興についても触れられている。ここでは、学習課題を教師が児童に与えるのではなく、児童が自ら考えるということを経験させた（視点3）。以下は、その学習課題である。

この町の未来へ向けて、どのような課題があり、どのような取組が必要かを話し合ってみよう。

課題解決へ向けて、児童は、思考ツールの活用を希望し、一人一人の意見を短冊に書き、全員の意見を黒板の思考ツール図3で整理した。



国や町の政治や行政について調べる活動を通して、児童一人一人が持続可能な社会の担い手として、自分に何ができるのかを考えさせた。本実践を起点とし、学校外での実践として町内の行事に参加した児童、町の行事へボランティアとして参加した児童が見られた。



(4) 奈良の大仏 ～課題提示と振り返りの工夫～

「聖武天皇はなぜ大仏をつくらせたのかを調べなさい」という問いかけに対して、児童は教科書を開き、「伝染病や飢饉の広がり、自然災害などを仏教の力で鎮めようと思ったから。」など、関連する記述を見付け出して読み上げることが多かった。この時の児童の心理状態は「答えを見付けた。」であり、「分かった」とは異なると考えた。

そこで、学習課題を児童にしっかり届け、児童が自分の頭を働かせて問題解決的な学習に向かうことができるよう、以下のような課題の提示を工夫した。

- T：当時の仏像は大きくても1.5mくらいだったらしいけど、聖武天皇は、どうしてこんなに大きな大仏をつくらせたのかな。
- C：仏教を広めるためだと思います。
- C：こんなに大きなものを作れるんだと、力を示したかったからかな。
- T：では、なぜ、仏教を広めたり、力を自慢したりする必要があったのでしょうか。教科書を開いて、当時の世の中の様子にヒントがないか調べてみましょう。
- C：伝染病が広がったり、自然災害が繰り返起こったりしたらしいです。
- C：天候不順で飢饉が人々を苦しめたり、豪族の争いがあつたりしたらしいです。
- T：そんな世の中なのに、たくさんの物資やたくさんの人々の力を集めてまで、なぜ大仏を作る必要があったのでしょうか。
- C：聖武天皇は昔の人だから、仏教が広がれば災いがなくなると本気で信じていたのかもしれない。
- C：宗教の力は大きく、大きな大仏を作るとなれば、大勢の人が参加することになって、より多くの人々に仏教が広がれば、みんなの心が安定すると思ったのかな。
- C：だから、権力を生かして当時としてはみたくもないほど大きくつくって、威力が増すようにしたのかも。
- T：なるほどね。では、みんなで「聖武天皇はなぜ大仏をつくらせたのか」を調べて考えよう。調べることは、みんなの予想を生かして、①どれくらいの大きさか、②どれくらいの人々がかわつたか、③仏教は当時の人々にとってどんなものだったか、そして先生からは、④どうやってつくつたか。これらを調べてもう一度みんなで考えてみよう。

高さ約15m、顔の幅約3.2m、手の大きさ約2.5mといった大仏の大きさを調べた児童らから、「それはどれくらいの大きさだろうか」「校庭に実物大を描いて実感してみたい」という意見が出され、校庭に出て実物大の大仏を描くことにも取り組んだ。

また、どのようにしてつくつたのかを調べる過程で、表面の金箔は、その大半が宮城県から献上されたことに気付いた児童がいた。そこで、歴史的事実と現在の状況とのリアルなつながりを感じさせることを意図し、涌谷町の天平ロマン館を訪ね、実際に砂金を採取し、児童に提示した。



写真2

砂金採りの様子と採取した砂金

学習の振り返りを通して、「自分が分かったことはこれだ」という自覚、ひいては「自分は成長している」という実感、すなわち学びの自覚を与えることにより、深い学びを促進したいと考えた。

そのため、「聖武天皇はなぜ大仏をつくらせたのか」という学習課題に対して、いったんは「聖武天皇は」から始まる振り返りをさせ、その後「自分(私)は」を主語とする振り返りをさせた(視点2)。以下は、振り返りの一部である。

私は、今の時代にこそ聖武天皇のような人が必要ではないかと思う。本当に世の中を変えられるのは、強いリーダーシップしかないと思う。

私は、リーダーによって自分の人生が変わってしまうなんて嫌だ。現代に生まれてよかった。大仏づくりに強制的に参加させられたり、仏教を信じなければならなかったりするのは受け入れられない。自分の考えで何が正しいのかを判断したいと思う。

だんだんと歴史の勉強が面白くなってきた。飛鳥時代以降はどんな人たちが世の中を動かしていたのかを調べてみたい。

歴史の諸事実を、市民を育てるという観点から再検討することによって、社会科の目標とする必要がある。これらの、現代社会に向けた、自分の生き方に向けた、生涯学習に向けた反応こそ、社会科が真に求める資質・能力の育成につながるのではないかと考える。

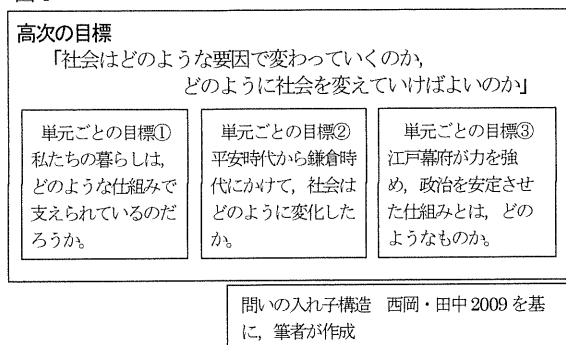
(5) 徳川家光と政治 ～学習目標の工夫～

本単元では、歴史に先立って学習した「我が国の政治の働き」を引き合いに、現代の政治と江戸時代の政治の考え方を比較したり、関連付けたりすることによって、児童に歴史を見る新たな視点を与えた。

また、前単元で学習した織田信長、豊臣秀吉の果たした役割、歴史上の意味を改めて考えながら、歴史上の事象を関連付けたり、総合したりして当時の歴史の転換期にある事例の様子や特色について考えさせることによって、「社会はどのような要因で分かっているのか、どのように社会を変えていけばよいのか」という高次の目標を児童に

意識させた^{図4}（視点1）。

図4



徳川家光の施策については、教科書・資料集等から、参勤交代、武家諸法度、田畑売買禁止、慶安御触書、寛永通宝の鑄造、キリスト教の弾圧、鎖国などを容易に見つけることができた。

ただ、調べたことを羅列しただけでは、意味の理解（知識の概念化）にはたどり着かないため、一つ一つの施策について「何のため」と問い、意味付けや抽象化を支援することによって児童の言葉に変換させた。

例えば、参勤交代や武家諸法度は「武士の統制」、田畑売買禁止や慶安御触書は「農民の統制」、寛永通宝の鑄造は「経済体制」、キリスト教の弾圧と鎖国は「外交体制」などと、児童と共に考えた。

さらに、これらを単元ごとの目標^{図4}と比較・関連付けることによって、徳川家光の施策が、統制のための制度や経済の安定、国益に資する外交など、本質的な意味においては時代が変わっても共通する土台があるということに気付かせた。

V 研究の振り返り 成果（○）と課題（●）

（1）単元を通した高次の目標設定（視点1）

- 目の前の学びをミクロな視点で捉えつつ、単元全体の学びをマクロな視点から俯瞰するというように、視点を往還させながら学ぶことにより、何のための学びか納得しながら、有用性や必要感を味わいつつ学習することができた。
- 他の単元や他教科等の学びとの関連性を意識する発言が増えた。汎用的で教科横断的なものや非認知的な力、すなわち資質・能力の育成に結び付く手ごたえを感じた。
- 教科書や指導書等に示された単元の目標を踏まえ、児童が学習内容を基に文章を書いたり、企画書をまとめたり、答えのない問いに対する

最適解を探究するにふさわしい目標設定であるかを更に吟味する必要がある。

（2）深い学習の誘発（視点2）

- 新たに学んだ内容をこれまでに学んだ内容と関連付けながら深く理解し、他の学習や生活の場面でも活用しようとする姿勢が育った。
- 学習過程と獲得させたい知識を構造的に捉え、単元構成をすることが大切である。

（3）自分事の学習の追求（視点3）

- 児童に学習活動を委ねる場面が増えた。また、時代と価値観の変化について捉えられるようになり、学習内容を自分事として考えられるようになった。
- 教師の目線から見て、現実世界でその教科の内容が使われている場面を教材化するだけでなく、児童にとって学ぶ意義や切実性が感じられるかを十分に検討したい。

VI おわりに

これまで正解とされてきたことが覆されたり、常識とされてきたことがそうではなくなったりする現在、私たちは自立した子供たちを育てることを通して未来づくりに参画している。その未来づくりに、今必要なことは、よき学び手を育てることである。そのことを信じて本研究に取り組んできた。

既定の研究と重ならない部分も多く、実践を形にするには苦勞した。しかし、「教科書の内容を勉強するのではなく、自分たちが調べたいことを課題として、教科書と関連付けて学ぶことが楽しかった」「先生の授業は社会の本質に迫るもので、本当に楽しかった」「社会に出てから役に立つ学習をしたと思う」といった児童の感想に強く勇気付けられた。

年度末のアンケートから、児童の社会参画に対する意識や、主体性を発揮しながらより良く生きようとする姿勢の改善を確かめることができた。今後も、教師として、未来づくりのために何ができるのかを探究し続けていきたい。

<参考>

- 18歳意識調査「国や社会に対する意識」日本財団
- 授業づくりの深め方 石井英真
- 教師の学び方 澤井陽介
- 初等教育資料 文部科学省